

フリーアナウンサー 佐々木 正洋さん 59歳

「裕次郎さんに『オイ、佐々木。ディナーに短パンで来るやつがいるか』と注意されて…」



指し棒がトレードマークだ。

夕刊を指しながら、名調子で新聞を読み上げる。テレビ朝日の屋のワイドショー「ワイドノス

私の秘蔵写真

「クランブル」で、夕刊キャッチアップを16年間担当した佐々木正洋さんだ。昨年、古巣を退社してフリーに。秘蔵の一枚は、石原裕次郎夫妻が写った食事会のひとコマだ。

局アナ、突撃リポーター、

「写真の裏書きに『S57・8・7』とあります。1982年の夏ですね。手前の横顔がボク。奥にいらつしやるのが石原裕次郎さんご夫妻。これは、裕次郎さんが解離性大動脈瘤の手術を受けた翌年、ハワイでヨットレースに出場したとき、取材に同行したりリポーターを招いて食事会をしたんです。そのときのひとコマ。

隠れて見えませんが、ボクの左隣に福岡翼さん。頭が半分写っているのが鬼沢さん。ええ、当時、バリバリの突撃リポーターの面々です。ボクはテレビ朝の『ア

31年前、石原裕次郎の取材でハワイへ



「写真の裏書きに『S57・8・7』とあります。1982年の夏ですね。手前の横顔がボク。奥にいらつしやるのが石原裕次郎さんご夫妻。これは、裕次郎さんが解離性大動脈瘤の手術を受けた翌年、ハワイでヨットレースに出場したとき、取材に同行したりリポーターを招いて食事会をしたんです。そのときのひとコマ。

6年目。あの梨元勝リポーター以降の後を受け、「アフタヌーンショー」担当になったばかり。司会は川崎敬三だった。

「いや、お恥ずかしい。他社を含めて20人前後が招かれて、裕次郎さんにごちそうになりました」

「デカイ、これぞハワイって感じのロブスター。生まれて初めて見た大ききだった

「オツ、佐々木……」
「実はこの時点で相当焦ってまして。早く手術の件を切り出さなくちゃって。2歩、3歩歩く。一呼吸置いて、大動脈瘤の『た』を言いかけた瞬間、裕次郎さんの手が肩を組むように、ガツと絡んできた。

「力ミサン、元氣か？」
「完全に今はなをくじかれました。戦意喪失というか、先に裕次郎さんの問いに答えなくちゃいけないような気がして。ハハハ。手術のコメントを取って他社を出し抜いてやろうという小ざかしい気持ちなんか、吹っ飛ばしちゃいました。

「あっ、ハイ」
「そう答えるのが精いっぱい。

映像がスタジオで放送される。司会の川崎敬三さんは大笑い。ボクの慌てふためく様子がバッチリ映ってたんです。

裕次郎さんに、服装を注意され、突撃をかわされて失敗……。あれは、いい経験になりました。駆け出しリポーター時代の一番の思い出です」

「ええ、各局、囲み取材でない裕次郎さんの独自映像を撮りたくて虎視眈々と狙ってました。うちのディレクターも『単独インタビューを撮れ』と。裕次郎さんは練習のあと、ヨットハーバーから別荘まで、スタッフフより先に船を下りてひとりで歩く。その間、十数回、

「もう、ドキドキでした。この場でヨットと関係のない、病気の質問をおつけるわけですから。まずは『お

疲れさまで。今日はどうかでした？』と、歩きながら

「お疲れさまで。今日はどうかでした？』と、歩きながら

「独自映像を撮れ！」

裕次郎に肩を組まれて

「オツ、佐々木……」
「実はこの時点で相当焦ってまして。早く手術の件を切り出さなくちゃって。2歩、3歩歩く。一呼吸置いて、大動脈瘤の『た』を言いかけた瞬間、裕次郎さんの手が肩を組むように、ガツと絡んできた。
「力ミサン、元氣か？」
「完全に今はなをくじかれました。戦意喪失というか、先に裕次郎さんの問いに答えなくちゃいけないような気がして。ハハハ。手術のコメントを取って他社を出し抜いてやろうという小ざかしい気持ちなんか、吹っ飛ばしちゃいました。
「あっ、ハイ」
「そう答えるのが精いっぱい。
映像がスタジオで放送される。司会の川崎敬三さんは大笑い。ボクの慌てふためく様子がバッチリ映ってたんです。
裕次郎さんに、服装を注意され、突撃をかわされて失敗……。あれは、いい経験になりました。駆け出しリポーター時代の一番の思い出です」
佐々木さんは、12日に金沢市で開かれる予定の映画「黒部の太陽」の上映会&石原まさ子さんのトークショーの司会を務める予定だ。